

## ① 大学教育学会第28回大会

大学教育学会第28回大会が2006年6月10日（土）、11日（日）に、東海大学湘南校舎で開催された。FD・授業評価部門委員長という役を担当させていただいているので、FD・授業評価を研究対象としている学会に参加することも意義あることと考え参加させていただいた。ただ、大会初日の土曜日は大学での講義等のために出席できず、2日目（日曜日）の大会に参加した。2日目は自由研究という形の講演が午前中に開催された。自由研究はIからVIまでのセッションに分かれており、IからVIまでのテーマは「初年次教育」、「授業法」、「科学教育・e-learning」、「評価・FD(1)」、「評価・FD(2)」、「教育論・英語教育・キャリアサービス」であった。FDと授業評価関連のセッションは同時に2つが並行開催で、どちらを聞くかを選択するのは非常に困難であったが、「FD・評価(2)」セッションの講演に「教員メンターによる授業参観の取り組み」と「学生は『授業アンケート』をどう思っているか——自発的な調査による学生のFD活動への参加——」という講演があったことで、このセッションの講演を聴くことにした。

「FD・評価(2)」の講演は次のような講演があった。

### 1 認証評価制度の現状と課題

山崎 その（同志社大学大学院）

### 2 日本における学士課程教育の自己評価

#### — 評価基準としての教育成果

串本 剛

（広島大学教育学研究所／日本学術振興会特別研究員）

### 3 教員の省察をもたらすFDプログラムの在り方

#### — 談話分析を手がかりとして —

佐野 享子（筑波大学大学教育センター）

### 4 教員が納得するFD活動のあり方とは

#### — 東海地区40大学におけるFD活動の事例を手がかりに —

青山 佳代（名古屋大学評価企画室）

### 5 TA教育とメンターリング

宇田川 拓雄（北海道教育大学函館校）

### 6 教育メンターによる授業参加の取り組み

佐藤 龍子（静岡大学大学教育センター）

阿部 圭一（愛知工業大学経営情報科学科）

### 7 学生は『授業アンケート』をどう思っているか

#### — 自発的な調査による学生のFD活動への参加 —

三浦真琴、佐藤龍子、山本さつき

（静岡大学大学教育センター）

以上の講演で特に興味深かった5、6、7についてその内容を簡単に説明する。

「TA教育とメンターリング」はカリフォルニア州立大学バークレー校（UCB）で行われている先進的授業の「入門化学授業Chem1A」についての調査報告である。約1200の学生に対して講義、ディスカッション・クラス（少人数、30名程度）、実験クラス（少人数、30名程度）でトータルに教育するシステムである。ディスカッション・クラス、実験クラスは60名のTA（大学院生）が主体的に担当している。これらを統括するのが講義担当の教員である。UCBでは大学院で「ティーチング」を教える科目の開設が義務付けられている。UCBではTA（UCBではGraduate Student Instructor, GSIと呼ばれている）はティーチングの実践だけでなく、その教育も受けるという形態をとっている。TAに対して授業担当教員はメンターとなる。メンターであるが、人を導き、守り、はぐくみ、支え、人生の新しい段階への変転をもたらす行動をとる人物とされる。「教育すること」を大学院の正規科目と位置づけることでTAを行うことのメリットは非常に高くなる。このような制度が本学の適応化可能かどうかは別として、TA活用を考える上で重要な情報であると思われる。

「教育メンターによる授業参加の取り組み」は「授業参観の取り組み」でも非常にユニークなものである。つまり、「キャリアデザイン」という授業について、教員が14回のうち13回出席して、各授業終了後メール等でその感想を担当教員に報告したというものであった。しかし、これは特殊な例であるとも報告している。つまり授業参観を希望した教員は退職した後、私立大学で教鞭をとる予定の教授で、キャリアア

ザインは必要であるということを感じていたことにより、「勉強したい」ということが根底にあり、授業を受け続けることになったということである。このような状況は稀であるが、有効な授業参観を行うには複数回（5回程度）の授業参観が必要であり、メンターとしての意識を持った参観者が必要であることの指摘もあった。

最後の「学生は『授業アンケート』をどう思っているか — 自発的な調査による学生のFD活動への参加 —」はFD活動への学生参加についての取り組みの一つであるが、これもかなりユニークな取り組みの報告であった。FD関連の委員会に学生が参加している取り組みはいくつかの大学でも実施されているが、本報告は学生の卒業論文のテーマとして学生が「授業評価」の信頼性を、学生を対象に調査した結果であった。その結果「全体として、学生は素直に、そして、真面目に授業評価を行っているということがわかった。学生にとっての「良い授業」は評価できる授業でもあり、ラクな授業という安易なものではなかった。ただし、学生の半数は授業評価の結果が授業に反映されていないと考えている。学生による授業評価の結果は信頼できるものであることがわたったので、これからも授業改善に活用すべきである。」と結論を導きだ

してきている。この結論からFD活動に対して、学生の参加を視野に入れるべきであり、そのような学生を育てていくべきだということを提案されている。しかし、学生がFD活動の一翼を担う存在にまで育てるには、大学自身がそれなりの方策を出さなければならぬことも事実であるという点も指摘されている。本学でもFD活動への学生の参加は重要であるということについて少なくともFD部門委員会では議論されている。しかし、FD活動の担う手となってもらえる学生は大学が育てる必要があるという点については、本学にあった形での対応について今後議論する必要があると思われる。最後に卒業論文作成者の山本さつきさんが言われた内容で印象深かったのは「始めは、まったくFD活動には関心がなく「先生らが勝手になにかやっている」程度であった。しかし、「FD研修会」に参加して、「先生らもがんばっているようだ」と思えてから、徐々にFD活動に関心が持てた」である。これは学生らにFD活動について知ってもらう機会を作り、さらにその内容が学生らの目に留まることが重要であると考ええる。

以上、長々と報告してきたが、本学のFD活動に関して少しで参考になれば幸いである。

## ② 近畿地区大学教育研究会第75回研究協議会

近畿地区大学教育研究会第75回研究協議会が2006年9月9日（土）に華頂短期大学で開催された。基調講演として、国際基督教大学名誉教授絹川正吉先生による「『大学の学校化』時代における教養教育」があり、午後からパネル討論（第一部会）として「教養教育に新たな可能性に向けて」というテーマで「工学系大学における倫理教育」（名古屋工業大学助教授藤本温先生）、「自然科学教育の意義について — 学生にとって、研究者にとって —」（慶応義塾大学教授表實先生）、「世界を逆方向から見る：教養科目としてのアラビア語」（京都大学教授岡真理先生）の講演があった。また、事務部会（第二部会）「大学職員による教育支援の現状とあり方」（華頂短期大学教学事務部長高田美恵子氏）の講演もあった。

ここでは基調講演のみについてご報告させていただく。大学の「学校化」、つまり中等教育の延長に位置づけられ、継続性を重視される教育が必要となった大学で教養教育は何をなすべきであるかという点を、国際基督教大学での取り組み「責任ある地球市民を育むリベラルアーツ教育」（特色GP）を中心に講演された。

また、現在の教養教育の背景となる日本における教養教育の歴史についても講演された。

絹川先生は自己形成を目指す「教養教育」は教育ではないので、もはや不成立である。一般教育に徹底すべきである。学士教育の三要素は「リテラシー・世界認識・自己実現」であるから学士課程カリキュラムの構成原理は学術基礎教育と一般教育となる。ICUでの学術基礎教育は「専門教育による直接的な知識・技能の修得でなく、disciplinesの学習を通して『批判的分析思考能力』等の基礎的アカデミック能力の訓練」と定義されている。本学でも共通教育について継続的な検討を行っているので、一般教育の先進的の大学について更なる調査と、その一般教育を受けての専門教育についての議論も進める必要があるかもしれない。本講演が教養教育学（教育学）に係わる内容であったため、著者の能力の範囲を超えるものであり、このような報告になったことをお詫びする。

（FD部門・授業評価部門委員長）